

何をどう変えるべきか

プラネタリーヘルス

長崎大学の挑戦

■12完■

プラネタリーヘルスについての記事も最終回です。これまでの連載を読んでいただいた方は、「人間」と「地球」の健康が切っても切れない関係にあることをご理解いただけたかと思えます。しかし、話としては分かるものの、実際に何をどう変えていけばよいのでしょうか？

私が長年関わっているシヤーガス病対策を例に考えてみましょう。これは中南米に多い寄生虫症です。サ



吉岡 浩太准教授

シガメというカメムシの仲間が病原体を運ぶので、殺虫剤をまいてサシガメを駆除すれば新たな感染を防ぐことができますが、サシガメは自然界にもおり、やがて家の中に戻ってくることで知られています。ここにプラネタリーヘル

プラネタリーヘルス学環 准教授

吉岡 浩太



中米の田舎の家とサシガメ(円内)

スの視点を持ち込むとどうなるでしょうか？ まず思いつくのは、人家にすみつくサシガメも生態系の一部だとみなし、駆除は生態系破壊につながるからやめるべきだ、という見方です。ただ、人間がシヤーガス病にかかるとも成り行き任せというところになってしまい、人間と地球の健康のバランスを追求するプラネタリーヘルスにはなじまないでしょう。次に考えられるのは、森の再生です。本来自然界にいたはずのサシガメが人家にすみつくようになったのは、もとの生息地が破壊されたからだという説があります。そこで、

森を再生することで人家に

来るサシガメを減らし、人への寄生感染も減らすというアプローチが考えられます。しかし、これは殺虫剤に比べてはるかに複雑で、長期的な取り組みが必要となり、その実現は困難でしょう。

プラネタリーヘルスを理念として掲げたあと、具体的に何をどう変えるべきなのか、実はまだ明快な答えはありません。私は、これがプラネタリーヘルスのアキレス腱ではないかと考えています。つまり、社会の在り方や私たちの行動を変えられる力がなければ、プラネタリーヘルスはいずれ誰からも見向きされなくなるかもしれないのです。

そこで、長崎大学では、昨年10月に「プラネタリーヘルス学環」を立ち上げ、学問と実践をつなぐための人材育成を始めました。現在、5人の学生が国内外から集まり、公衆衛生博士(Doctor of Public Health: DrPH)という博士号の取得を目指して日々学んでいます。この教育プログラムでは「知識を「行動」に変換する訓練を積みみます。プラネタリーヘルスの看板のもとでDrPHを授与するのは、世界でも長崎大学が初めてではないかと思えます。プラネタリーヘルスをどう実現すればよいのか、という問いに、すぐに答えは出せません。学生も講師も共に議論をしながら、実現可能なアイデアをこの学環から生み出し、世界に提案できるようにになりたいと思っています。



研究に関するサイト